

## 16世紀末京都・上京における隣地境界線の生成過程

## Making of the adjacent boundaries in the upper district of Kyoto at the end of the 16th century

早見洋平\*・土本俊和\*\*

Yohei HAYAMI and Toshikazu TSUCHIMOTO

This paper reconstructs "Utsuboya-chou" and "Kodo-chou" facing on to Kokawa-dohri street in the upper district Kamigyo at the end of the 16th century. "Rakuchu rakugai zu" depicting the middle of the 16th century's Kyoto showed that there were streets along the both sides of Kokawa-river which flowed from north to south. On the other hand, the "Rakuchu ezu" drawn in the first part of the 17th century showed no street on the west side of Kokawa-river. The transformation can be guessed by the reconstruction from "Sashidashi" in the "Daichuh'in archives". "Sashidashi" measured not only frontage of dwellings but width of backyards in 1587. The paper concludes that the dwellings facing on to the street or across the river were started to stand in a line with no plot division after the fire in 1573. It was from 1573 to 1587 when the communal backyard behind the houses was gradually divided into strips among the dwellings.

**Keywords** : Utsuboya-chou, Kodo-chou, plot division into strips, reconstruction, Daichuh'in archives, buildings prior to plot division

靱屋町, 草堂町, 短冊形地割, 復原, 大中院文書, 建物先行型

## 1. 目的と方法

本論は、歴史的な都市の形成を建築的なスケールから把握することを意図している。都市域がかたちづくられていくプロセスのなかで、建築の果たした役割を問う。この問題意識を通じて、都市の挙動と建築のそれを同一の俎上に載せることにより、この両方を一連のものとして考察し得る。

計画された都市と計画されていない都市 (planned and unplanned<sup>1)</sup>) という、都市の二項対立的な捉えられ方はさまざまであるが<sup>2)</sup>、この分類法は、第一に計画の主体として為政者のみに偏重し、第二に計画と論理を同義的に連想している難点をもつ。つまりこの分類法は、為政者のコントロールから逸脱する現象にたいして、無計画とのレッテルを貼ったうえで、"unplanned" のカテゴリーをあてがうものである。そのためこの種の分類にもとづく考察は、匿名かつ不特定多数の個人による無意識的な都市形成を論理的に明らかにする術をもたない。しかし実際の都市は、現実的な人々の暮らしを踏まえた計画と、計画的なコントロールの影響をこうむった現実の、どちらが卓越することもない場所であり、引かれた線とそれに則る民衆という構図からなる世界ではない。

本論は、計画されていない都市のなかにある計画性、不規則な都市膨張のなかにある規則を探る。このとき、具体的な建築の姿にたいして積極的に目を向け、その捕捉のために、隣地境界線のありように注目する (図-1 参照)。

この考察の対象となる時代には、中世的な体制が崩れて新たな秩序が生まれつつある16世紀末を選び、場所は京都・上京の小川に沿った地域とする。すなわち、元龜4年 (1573) の上京放火からの復興を契機とする都市形成を観察することになる。織田信長による上京放火と、豊臣秀吉による天正後半期の寺地の移転は、当該地域における領主的土地所有の解体の意義をもつとともに、人

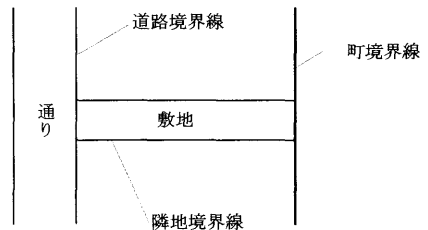


図-1 敷地境界の模式図

\* 正会員 カミムラ建築研究室 (Kamimura Architect & Associates)

\*\* 正会員 信州大学工学部社会開発工学科建築コース (Shinshu University)

口の増大する中心域にたいして、開発可能な新しい土地を提供した。その土地とは、前者は焼失により経済的価値の喪失した更地であり、後者は元境内であり、いずれも戦国期末からの切断面をもった新しい土地とみなせる。そこに展開した町々に即して、従前の慣習を保持した旧町人と、都市膨張の基調をなす大量の新参者の協働による、生活環境の整備の跡を読みとっていく。

小川通りの町々の様子を捕捉する方法として、復原を用いる。復原の史料として『大中院文書』所収の指出を用いる。本論は以下に、指出の実情に適う方法を採用して復原し、都市形成の実態を考察するうえできわめて示唆に富む地割復原図を提出する。

この復原図を作成する作業、より直截には隣地境界線と道路境界線を引いていくという作業において、そうした境界性を現実化していた《物》の存在を本論は重視する。寸法だけあって、物が無いということは単なる観念に属する。物には必ず物の形態があり、それにしばしば機能が附与されている。逆に、種々の機能が附与されている隣地境界線は形態であって、そこには物が存在している。物の存在に裏打ちされていない隣地境界線は、単なる観念であり、都市の実態を反映しない。

本論は、当該地域における16世紀末の隣地境界線の意義を、町場化のための準備や賦課の単位といった観点からさしあたり切り離して考察する。共同的な町域のなかで個々の家がある程度まで独占的に用益できる範囲を示す境界装置の存在を前提としたうえで、それに対応する形態として隣地境界線を捉える。端的に言えば、家、築地、土塀、川といった、当時の都市空間を構成していた《物》を前提としないかぎり、適切な文書解読にもとづく的確な復原はあり得ない。

さらに本論は、古文書に記された文言に即して形態を与えていく過程、すなわち復原の過程でなされた、史料の解釈や作図上の方針などを詳述する。このことは、復原から恣意性を排除するとともに、再現性を備えさせることを意図している。この過程を再検証することによって、得られた復原図の妥当性を判断できる。かつ、その図にもとづいた考察そのものが、検証可能性を裏打ちするゆえに科学的たり得る。

以上の考察を通じて、通りに面してたち並ぶ家々をきっかけに展開していく都市形成の実態が明らかとなろう。すなわち本論の目的は、建物先行型による都市形成を文献史料から捕捉することにある。ここにいる建物先行型とは、都市形成のタイプの1つとして、地割が施されていない土地に建物がまず立地し、その建物が土地の形態を規定することにより、地割が生成される過程を指す<sup>9)</sup>。

2. 史料・大中院文書

平成元年（1989）、襖絵の下張りとして発見された大中院文書は、豊臣政権下の京都における庶政を伝える貴重かつ有用な史料である。役所に提出された正文は、反故紙となったことで政権交代による意図的な廃棄を免れた。

たしかに、これまでに天正期の町の指出は存在した。下京にある3町の町控により復原図が作成され、その図が繰り返して引用され、多くの情報をもたらした<sup>4)</sup>。しかし、それらは織豊期京都の、何百あったかも知れない洛中の町の全体像を得るにはあまりにすくな過ぎ、そのみに頼るならば偏った考察を導きかねない。大中院文書所収の指出はその欠陥を決定的に補う。

記されている年代は「天正15年（1587）から文禄3年（1594）までの7年間に集中して」<sup>5)</sup> おり、指出にかなしては年月日を確認できるものはすべて天正15年のものである。本論があつかう上京の指出はすべて年月日を欠くが、年代が記された指出との類似性、および内容ごとの年代的なまとまりから推して、天正15年が濃厚であろう<sup>6)</sup>。上京関係の指出について、場所・京都市歴史資料館架蔵複写本の受入番号・記載内容の一覧を下表に示す〔表－1〕。

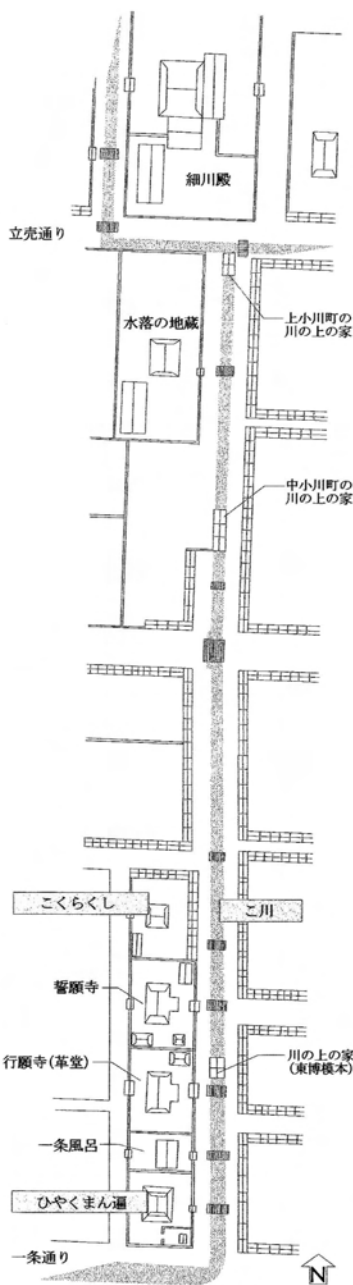
表－1 大中院文書・上京関係指出一覧

場所	受入	記載内容
御三間町	141	口、奥、（この）家の分、川の上
御三間町	142	口、奥、（この）家の分
上小川町	145	一面口、奥へ
上小川町	146	一面口、奥へ
上小川町	147	一面口、奥へ
中小川町	124	口、奥（へ）
中小川町	125	口、奥（へ）
中小川町	148	口、奥（へ）
革堂町	123	（破片）
革堂町	126	口、奥／口、をくへ、うらのほゝ
鞆屋町カ	127	口、をくへ、うらのほゝ
革堂町	128*	口、をくへ、うらのほゝ
革堂町	129	口、をくへ、川のはゝ、うらのほゝ
革堂町カ	130	口、をくへ、川のはゝ、うらのほゝ
鞆屋町カ	131*	口、をくへ、川のはゝ、うらのほゝ
（場所不明）	143	一面口、奥へ、うら（奥）のはゝ
（場所不明）	144	一面口、奥へ、うら（奥）のはゝ
相国寺のまへよこ町	177	口、奥へ

とくに把握内容を見ると、間口寸法・裏行寸法・家主名のほかは、矩形からの変化に応じた敷地形状の補足説明であり、地積・地子高・地子収取者は一切記載されていない<sup>8)</sup>。

小川は賀茂川から分かれて南流し、立売通りでいったん東折してさらに南へ流れ下り、一条通りで西折して堀川に注ぐ（図－2 および図－3 参照）。この立売通りか





図－3 小川の流路(洛中洛外図屏風町田本による模式図)

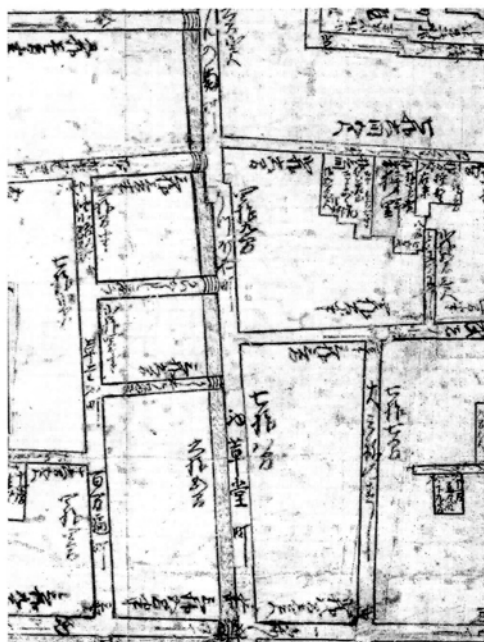
この指出は捉えている。よってこのとき、戦国期の洛中洛外図屏風でみられた、上京放火以前の景観とは異なり、小川通りの西側を南北に走っていた街路は家屋敷のなかに取り込まれた結果、その機能を失っているものと考えなくてはならない。

それはむしろ17世紀前半の洛中絵図(図－5 参照)に見出される形態である<sup>9)</sup>。縦に「うつほや町」「西革堂町」



図－4 16世紀の小川と小川通り

(洛中洛外図屏風・東博模本、革堂と誓願寺の門前、京都国立博物館編(1997)「洛中洛外図」淡交社、31頁)



図－5 17世紀前半の小川と小川通り

(洛中絵図 寛永拾四年丑七月二日、うつほや町と西革堂町)

と記された筋が小川通りであり、通りに接して並走するわずかに濃い筋が小川を表わしている。通りと図子によって四辺を囲まれた西側街区の東辺は、小川に占められているので、小川通りに直に面することができない。しかし、川が家屋敷の内部にとり込まれているとみたとき、小川の東側の線(つまり小川通りの西側の線)を街路と街区の境界とみなすことができる。このとき、家屋敷のなかを川は流れているが、もはや川の西側の街路はまったく確認できない。

16世紀を描く洛中洛外図屏風と17世紀前半を捉えた洛中絵図の比較から明らかなのは、戦国期から近世初期のあいだに、小川の西側の街路がその役目を終え、その土地が個々の敷地の一部へと入り込まれていく過程があったことである。この間に上京は、放火に遭い、復興を遂げ、小川の西側に位置していた寺地は豊臣秀吉（1536-1598）の命で移転した<sup>10</sup>。その過程の萌芽的状況は、すでに戦国期の洛中洛外図屏風のなかに見えている。たとえば、高橋本の描く草堂門前の川の上の家（図-6参照）は、川幅にたいして若干寸足らずで、岸と岸に土台をさしかけるのではなく、河道内に杭を打ちこみ、その杭に土台をさしかけているように見える。注目すべきは家のウラ側、すなわち川の西側である。家のウラから街路対岸にある草堂の築地まで、土塀を伸ばしてウラに土地を囲い込んでいる。川の西側にある街路は封鎖され、通りに面した川の上の家がウラ地を囲い込むすがたを捉えている。すでに絵画史料から確認できるこうした経緯を、文献史料からなぞっていく。



図-6 草堂門前の川の上の家（洛中洛外図屏風・高橋本、京都国立博物館編（1997）「洛中洛外図」淡文社、44頁）

さて、復原にあたって、この8つの家屋敷のなかで例外的にウラの幅が記されていない、5番と6番に着目する。代わりに、5番と6番には両者のあいだの隣地境界線の雁行が記されている。6番は著しく汚損しているが、残存する文言は5番と完全に対応している<sup>11</sup>。すなわち、「西ヨリ五間三尺五寸め」に隣地境界線の雁行があり、そこで凹凸が過不足なく噛み合っているとみなすことができる<sup>12</sup>。

こうして、間口とウラの幅がずれていない5番・6番（図-7中★印）を、家とウラ地がずれていない矩形の敷地であると理解する。ウラ地における隣地境界線がそのまま通りに直交する垂線となっていると捉え、この隣地境界線をこの復原図中の南北方向の寸法の規準にして、川の上の家の間口寸法とウラ地の幅寸法を、間口とウラの幅とで別々にとっていくことができる。つまり、建物の幅とウラ地の幅を別々にとっていく。ここで、「川の上の家」を《物》として捉える。両寸法のずれは、任意

の奥行規模をもつ通りに面してたつ家の存在を想定することによって、吸収される<sup>13</sup>。すなわち、「間口」とは、家が通りに面している部分の間口寸法である。「うらの幅」は、家がウラ側で面しているウラ地<sup>14</sup>の幅、すなわちセド<sup>15</sup>の幅である。そして両者の幅が別々であるということは、一直線をなす隣地境界線には建物が納まっている状態を指示する。この形態上の特徴を本論はさくばる重視する。

また同時に、間口寸法に《物》としての家に対応したのと同じように、町境界線にも、対応するなんらかの境界装置を想定する。東西方向（裏行寸法）の起点として、町境界線を《物》として捉える。このとき、地尻が土塀や垣などの一直線の《物》で揃えられ、逆に家が道路側で微細に凹凸する<sup>16</sup>。

以上の方針にもとづきながらも、実際の復原に際しては、いくつかのバリエーションが生まれる。バリエーションを生み出す分岐点と選択肢<sup>17</sup>の大枠は、以下の3点である。

### 1) 地尻の揃え方

裏行の規模は大きく3つの段階に分布している。そのとき、(i) 3段階とする、(ii) 3つとも揃えて1直線とする、(iii) 北側2つを揃える、(iv) 南側2つを揃えるという、4通りの地尻の揃え方が考えられる。

### 2) 川的位置

流路は、家の位置や5番・6番の隣地境界線の雁行地点や7番の広がっている部分の扱いなどと、かならず整合しているはずである。1)の(ii)以下の場合については、どの家のまとまりを「川之上」と判断するかによって、選択肢が構成される。一方で、川の水面上で隣地境界線が雁行するとか、川岸から著しく離れた場所にたつ家というような形態は、現実的な物と状況を想定し得ないため、その選択肢を棄却する規準となる。

### 3) 川の雁行

2)に関連して、川が途中で曲がっているのかどうか、曲がっていたとしてどのように曲がっているのか。

これらをふまえて、次に2つの復原案をバリエーションとして示す（図-7の①および②参照）。

まず、地尻を大きく3列とし、逆に家々を通りに面して揃える<sup>18</sup>。川は、すべての家の下をほぼ直線的に流れる流路を想定する。そのとき、7番の家における川幅の広がり、雁行部分での桁形とし、あわせて、7番の家の奥行も川幅と同じく3間とする（図-7復原案①）。この形態が第一のたたき台となる。

他方、前図をふまえて地尻を1列にまとめ、通りと家並を大きく3列に雁行させる。5番・6番の隣地境界線の雁行地点に川がかかってはならずかつまた7番で川幅3間であるという要請を満たして、8番・7番の家の下を流れ、7番ですこし雁行して、そのほかはウラ地を直線的に流下する(図-7復原案②)。

復原案①では、5番・

6番の隣地境界線の雁行に意味を見出せないが、復原案②では、雁行部分が西岸に合致して、西岸を断層面としてウラ地の幅がずれるという、いかにももっともらしい状況を見出せる。

一方、復原案①では、家並と小川の流路が完全に合致するのにならして、復原案②では、家並が雁行するために、流路が図の通りだとすると、川の上でもなければ横でもない家(1番～4番)が出てくる。言うなればこれらの家は小川東岸の街路の中央に中央分離帯のごとくたっていることになり、その現実的な状態が了解しにくい。とはいえ、6番から1番までの間では流路の変化を示す文言が『大中院文書』の中に見出せない。

先の2つの復原案を統合するかたちで、受入131番の復原図を示す(図-7復原案③)。すなわち、「1) 地尻の揃え方」の「(vi) 南側2つを揃える」にもとづき、南側の6軒の地尻を揃える。北側の2軒は川の上にたち、南の6軒は川の横にたつ<sup>29</sup>。川の屈曲ないし雁行を直接に示す文言は存在しないものの、7番においてのみ川幅が広い状態を図化したとき、流れがここで凸字状に突出するか、凸部の前後で切り替わって雁行するかのはいずれかとなる。本論では、図-7に示したような家並を一致させたり地尻を一致させた場合の整合性から推して、小川の流路は7番と6番の間で雁行しているものと理解する。逆に、7番で川幅に変化が見られる以外に流路の変化を想定させる文言は一切見つからないから、7番と6番の間以外の場所で川を曲げたり傾斜させたりする根拠は見当たらない。

### 3-2 東側の復原

受入131番と同様に、受入128番の全文を以下に掲載し、通し番号を振り、mm単位に換算する。

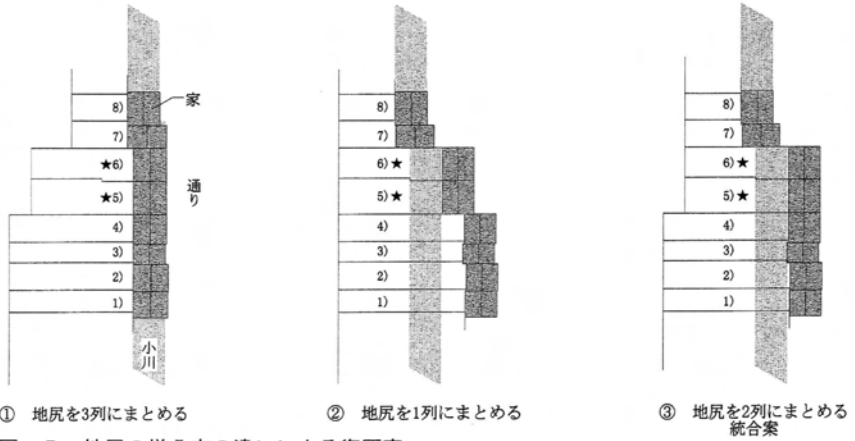


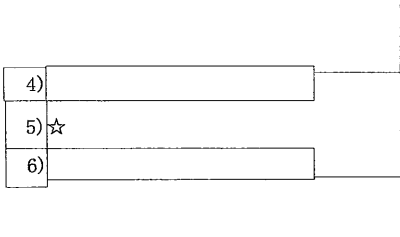
図-7 地尻の揃え方の違いによる復原案

史料2 革堂町カ(大中院文書, 受入128番)  
(前欠)

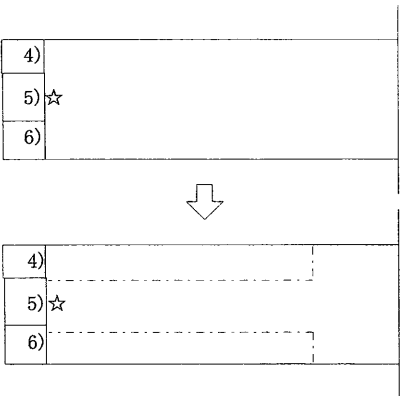
- 0) 但拾五間よりさきへ□間一尺八寸ひろく候  
かきや 浄極(印)
- 1) 口老間四尺七寸五分 をくへ拾五間  
うらのは、老間三尺 大こくや 彦次郎(印)
- 2) 口老間六尺二寸 をくへ拾九間老尺  
うらのは、老間五尺 つのたや 孫右衛門尉(印)
- 3) 口老間三尺五分 をくへ拾九間老尺  
うらのは、老間三尺五寸 こまや 彦兵衛(花押)
- 4) 口老間三尺九寸 をくへ拾四間五尺三寸  
うらのは、老間四尺三寸 □□や 彦右衛門尉(花押)
- 5) 口式間老尺七寸 をくへ拾八間五尺八寸  
但拾四間五尺ヨリ北へ老間二尺四寸ひろし  
又南へ老間二尺四寸ひろし 宗意(印)
- 6) 口老間五尺六寸 をくへ拾四間五尺  
うらのは、老間三尺二寸五分 □□(□)
- 7) 口式間参尺六寸 をくへ拾九間  
うらのは、式間四尺七寸 さかや 喜介
- 8) 口式間老尺式寸二分 をくへ拾九間  
うらのは、老間五尺九寸 寿七□(花押)
- 9) 口式間式寸五分 をくへ十八間五尺七寸  
うらのは、式間二寸五分 中持○
- 10) 口老間五尺六寸五分 をくへ十八間四尺  
うらのは、老間四尺二寸 与三郎
- 11) 口老間三尺八寸 をくへ十間五尺八寸  
うらのは、老間三尺八寸 大工 源左衛門尉○  
かい所のとをり道
- 12) 口式尺九寸 をくへ十間五尺八寸  
右之をくへ老間六尺 をくへ七間五尺  
うらのは、式間四寸 町之会所○
- 13) 口式間老尺五寸 をくへ□間四尺五寸  
(後欠)

さきほどの受入131番と同じように、受入128番においても、「口」を家の間口寸法とし、「うらのほゝ」を家のウラ地の幅とする。そのうえで、「口」と「うらのほゝ」を別々に寸法をとっていき、任意の奥行の家を街区の通りに面した部分に想定するという方針に従う。ただし、受入128番の場合、川の幅にもとづいた家の奥行を前提できないので、川の反対側の家々にあわせて、一律に2間半としておく。

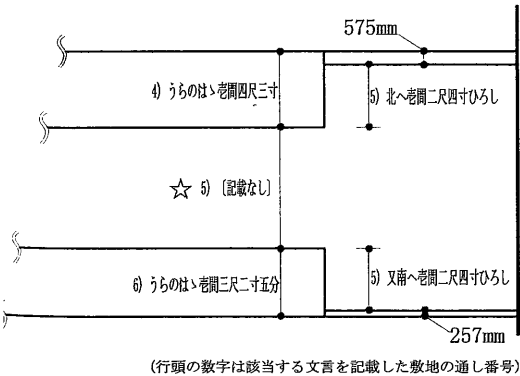
ここでも、「うらのほゝ」を記していない5番（☆印）の敷地に着目する<sup>24)</sup>。5番の敷地では通りに面してたつ



図－8 4番～6番を文言通り作図



図－9 撞木形敷地の形成モデル



図－10 文言と形成過程を考慮した復原の詳細

家の間口寸法とウラ地の幅が同じで、両者がずれていないものと仮定して、復原にとりかかる。

記載されている文言通りに形態を与えたとき、3番・4番のあいだ、および6番・7番のあいだの隣地境界線に、文言にはない雁行が発生する（図－8参照）。さらに、このような複雑な隣地境界線ができあがる事情を推察しにくい。むしろ、図－9に示したような過程を経て、5番のような撞木形の敷地ができあがったと考えられる。すなわち、分割されていない一体的な町域、あるいはすくなくとも3軒分の間口に相当し得る規模のウラ地が1つまずあり、両端の2軒が中央の1軒と地尻の境界装置を共有しつつも、各々の間口寸法に準じて（中央の家に気兼ねをしながら）ウラ地を囲いこむ。もし当初の大きな敷地が5番の家主に占有されていた土地であったならば、5番から4番・6番への分筆ということになる。

つまり、この場合は5番のウラ地を単一で規準とするのではなく、原初的に一体であったと想定される4番～6番（☆印）というかたちで、南北方向の寸法についての規準として扱う。

図－9に示した分割過程にもとづくならば、5番の隣地境界線の雁行部の、通りと平行する部分の長さは、北側では4番のウラ地の幅と、南側では5番のそれと同じになる。文献史料における文言と形態の生成過程をとともに満たす地割は以下である（図－10参照）。4番～6番は単体としてではなく3軒で矩形の一体的なウラ地をなすことから、3・4番間、および6・7番間の隣地境界線は直線である。その直線から所定のウラの幅分だけ平行に離れたところが5番との隣地境界線となる。5番の「うらのほゝ」の記載はない。本来同じ部分の寸法を表裏別々に計測した結果としか考えられない、3・4番間と6・7番間の隣地境界線のずれには、寸法計測のすきまを仮定する。対応するものとしては、何らかの厚みをもった構築物（境界装置である土塀など）の存在を想定する<sup>25)</sup>。

以上の方針のもとに、受入128番の復原図を示す（図－11東側）。

### 3－3 川の上の家あるいは通りに面してたつ家を原形とする、短冊形地割の生成および町域の形成

いま提出した復原図は、地割復原図でありながら建物としての家を書き込むという、土地と建物の双方を捉えた形態をなしている。この家並は、ウラ地の隣地境界線を通りまで延長してできる一筆の矩形の枠内に納まらない。川の上や通りに面してたつ家の存在を前提としなければ、間口と「うらのほゝ」とが異なる寸法を記した指出に即した復原図は描けない。同じ理由で、家が先行し

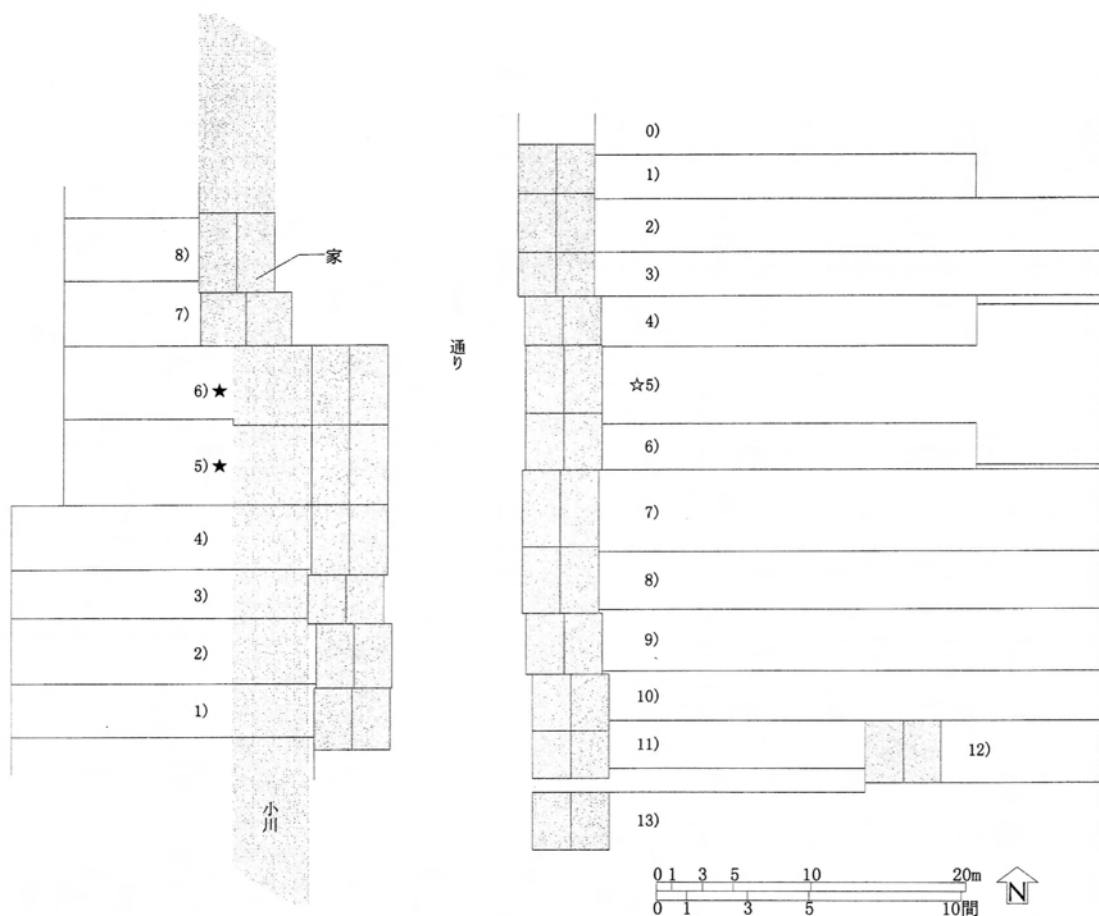


図-11 天正15年・革堂町と一連の町の復原図  
西側(左図) 鞍屋町(受入131番), 東側(右図) 革堂町カ(受入128番)

てたっていなければ、こうした地割は生成し得ない。つまり、上京放火後の小川通りにおいては、地割よりも先に建物である家がたったといえる。それはおそらく奥行2～3間の、平入りの小屋であろう。たち並ぶ家を規準として、より正確には、家が通りに面した部分の長さである間口寸法を原則的な規準として、ウラ地が零細切区されていった。それは見方を変えれば、小川の西側において街路が家屋敷へと転じたことから明らかなように、土地の用途変更を経て屋敷地を創出する過程でもある。すくなくとも16世紀末の上京には、計画的に用意された屋敷地、あるいは放火以前より踏襲された屋敷地のみにあらず、先行的にたち並ぶ家を契機となし崩的に完成に至る零細区分された屋敷地があった。

川の上や通りに面した家々が街路や街区を潰しながら町域を整えていく過程をモデル化することができる(図-12参照)<sup>23</sup>。

その前提として、戦国期の洛中洛外図屏風が好んで描

写したように、中世より上京一帯には川の上に家を掛け渡す習慣があり得たこと、および、家は川の上だけではなく、東側の通りの川沿いにもたてられる場合があったことを指摘しておく<sup>24</sup>。元龜4年(1573)、織田信長による上京放火によって、一帯は甚大な被害をうけた。家がすべて焼亡した場合も、部分的に焼け残った場合も、被災をまねがれた場合も、ともに重要なのは、放火後の復興期にもまた、上京の川の上や旧街路・旧街区の上に家がたてられた状態があったということである(図-12の①)。家が以前から継続したものであっても再興・新築されたものであっても、いずれの場合でも、小川通りの東側においてはウラ地が街路であったことが定かである以上、そこにはあらかじめ地割があったとは考えられない。仮にあったとしても、それは小川の水面上だけを個々の家々に応じて分割したものにとどまる<sup>25</sup>。

つづいて、先述のように、すでに一部ではおこなわれていた建築行為ではあったが、街路をふさぐようにして



① 元龜4年以降  
復興後、戦国期と同様に  
川の上や川の東側に家が  
たち並ぶ

② 元龜4年～天正15年  
川の上の家が西側の街路を塞ぎながら、  
段階的にウラ地として囲い込む  
川の横の家もこの囲い込みを追随する

③ 天正15年  
家とウラ地がずれた隣地境界線  
をもつ、町域が形成される

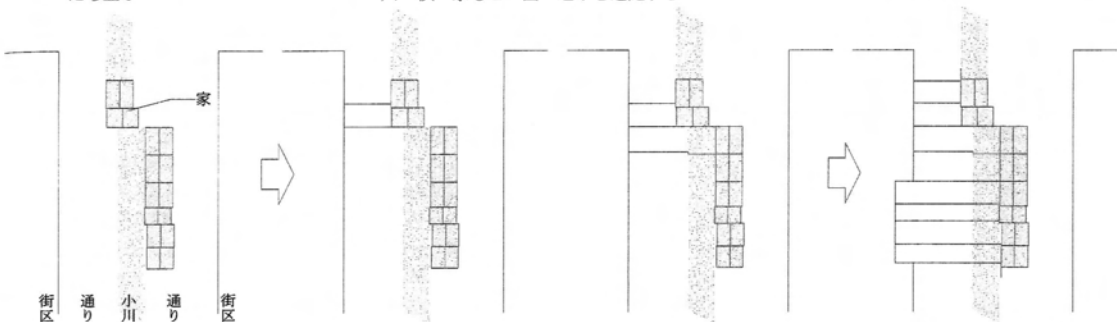


図-12 川の上の家を契機とする短冊形地割生成モデル

自らの家のウラ側に小片の土地を囲う家が出てきただろう（図-12の②）。その原因として、家々の諸設備の充実に伴う、奥行規模の充実が挙げられる<sup>95</sup>。戦国期の洛中洛外図屏風に見られたような一体的かつ共同的なウラ地を不要とするためには、個々の家が井戸や便所といった設備を準備し、完結していく必要がある。そのとき、家屋の規模の増大分はウラ地に向けて振り向けられるほかない。一体的かつ共同的に利用されていたウラ地が解体されるに伴い、個々の家々の背後の土地の重要性の認識が高まり、そこに向かう増殖が本格化するとき、家々が個々に用益できる範囲を物理的に明示しておく意味で、居住する町人自らが何らかの境界装置を設けたと考えられる<sup>96</sup>。復興を促進せんとする公儀や、かつて地子を収取していた領主による専断的な地割の敷設が建物の立地に先行していたという地割先行型<sup>97</sup>は、この場合、妥当しない<sup>98</sup>。家屋敷を貫通する流路は、短冊形地割の生成よりも早い段階で、川と家々の配置があったことを示している<sup>99</sup>。

川の上や通りに面した家による、ウラ地への展開と隣地境界線の伸張は、それが町境界線に達した時点で終了する（図-12の③）<sup>100</sup>。

この雁行する隣地境界線は、個々の家の更新にともなう、道路境界線までオモテに向って伸張されたならば、換言すれば、ウラ地にもとづいて面路部分（家のたっていた部分）が割りなおされたならば、あまねく見られるような細長い矩形からなる短冊形地割が完成する。

#### 4. 結論

大中院文書所収の指出から、受入131番（靱屋町カ）および受入128番（草堂町）の地割を復原した結果えられた、天正15年（1587）時点で小川通りに面した家並は、一直線の道路境界線とそれに向かう垂線である2本の隣

地境界線から成る矩形の枠内に納まらない姿であった。これは隣地境界線よりも時間的に家が先にたったことに起因する。このとき、はじめにあったのは、「プラン」としての地割ではなく、「何らかの前都市的核」<sup>101</sup>としての建物であった。すなわち、上京放火後に形成された都市域では、街区ではないところに家がたち並び、その家のウラ地の拡充によって町域ができあがる場合があった。また、一体的な町域が間口に準拠しながら細分化されることで短冊形地割が生成する場合があった。

放火後の上京という個別的条件を捨象したとき、小規模な建物群によるこのような地割の形成は、あまねく見られた現象であったとの推測が成り立つ。というのも、近世初頭の急速な都市膨張にあって、新生の都市域に、新設であれ継承であれ地割がことごとく存在していたとは考えにくい。一方、建物先行型は、効力のある地割をもたない土地に、家々がたち並び、これらが個々に更新してゆくという、きわめてシンプルな環境設定から展開し得る。このとき、建物先行型による形成過程を近世都市化に見られた支配的なタイプと見通すことができる。とりわけ放火から復興した京都・上京の小川の上は、建物先行型によって進展した都市域の典型である。

#### 補注

- (1) アルド・ロッシは、「プラン」を都市が内包するさまざまな要素の1つ（に過ぎない）と考えることで、計画された／計画されていないという二分法を絶対視しない。（文献1）p.99参照）
- (2) たとえば、「安堵型」と「創出型」（文献2）①p.163参照）、「比較的自然で、一般的過程の型」と「領主主導による人為的な型」（文献2）②pp.340-3参照）、「自治型都市」と「建設都市」（文献2）③p.42参照）。
- (3) 「建物先行型」に対立する概念として「地割先行型」（補注図後掲）がある。なお、短冊形地割が近世化の過程で生成されたとする説に関連する論文は文献3）の通りである。

(4) 洛中の天正期の検地関係史料について、その年月日が知られるものは以下の通りである。表中の○印は史料が大中院文書所収であることを示す。(文献6)の表2)および、文献3)⑩の表1より)

[現存する天正期の検地関係史料]		
年月日(天正)	場所	大中院文書
15. 5.10.	木屋之町	○
15. 8.	長尾町・上堀川町	○
15. 9. 1.	下堀川町	○
15. 9. 2.	不明(藪内町まちとむろまちのあいだ)	○
15. 9. 2.	不明(御幸道橋より二町め中町)	○
15. 9. 3.	鍛冶町	○
15. 9. 9.	五条坊門町尻	
15. 9. 9.	饅頭屋町	
15. 9.10.	秋野野町	○
15. 9.	不明(長命寺西町)	○
16. 2.18.	冷泉町東頬	
16. 2.19.	五条坊門町尻	
16. 2.20.	姉小路町	
16. 2.	饅頭屋町	
17.11.21.	姉小路町	
17.	饅頭屋町	
18. 1.10.	姉小路町	
18. 1.27.	冷泉町東頬	

一見して天正15年9月の占める割合が高い。また、宇野日出生の整理(文献5)84-5頁の目録参照)により、大中院文書には、文書の種類ごとに近似する日付で構成されるという規則性があることをみてとれる。

(5) 豊臣期京都の検地は天正13年(1585)から20年(1592)までのあいだに、把握する内容と地域について5段階を経た(文献3)⑩pp.117-8参照)。当該史料はそのうちの第2段階に位置付けられる。一方、吉田伸之が捉えた「天正末の洛中検地の意義」(文献6)pp.98-9参照)は、もっぱら第3段階の史料に依拠したものであった。

(6) 実際の地理的配列は、中小川町と革堂町のあいだには針屋町と靱屋町を含む。ここで、記載内容をより詳細に整理する。一連の指出は土地と家の状態を3種類に書き分けていた。

[革堂町と一連の指出の記載の詳細]		
受入番号	記載内容	備考(数字は記載軒数)
126	□ 奥	12
126後端部	□ をくへうらはは	「革堂町 東」以降 1
127	□ をくへうらはは	14
128	□ をくへうらはは	13
129	□ をくへうらはは	9
129後端部	□ をくへうらはは 川之は	「西〇川之上」以降 3
130	□ をくへうらはは 川之は	3
131	□ をくへうらはは 川之は	8

126番で「革堂町 東」、「こうたう町」が見え、すでに革堂町と断定(文献7))されている128番・129番と、書式や字の崩し方が共通していることから、これらが革堂町の指出である可能性を指摘できる。同じ理由で、127番・130番・131番も革堂町であることを疑える。つまり126番から131番まではすべて革堂町の指出であるとも考えられる。しかし、126番の「革堂町 東」の文言より前行にも記載があること、126番から129番の軒数が多いこと、127番で「うつはや」が5人連続

で登場することなどを考えると、計測は町ごとにおこなわれたとしても、提出する用紙への記載は隣接する町と合同でおこなわれている可能性がある。あるいは「役所に提出になった正文」という大中院文書の特徴として、町ごとではなくて、小川の東側・西側ごとに編集されている可能性がある。そもそも京都市歴史資料館によるナンバリングが、指出の記載の順序を反映しているとは限らない。たとえば、靱屋町と革堂町が合同で指出を提出しないし編集するなら、靱屋町の東側の北端からはじまり、南下し、そのまま革堂町の東側を書上げ、革堂町の南端で西側に転じ、北上し、靱屋町の西側の北で終わるだろう。よって、126番と129番が革堂町である以外には、これらの史料は、東西どちらの側であるかはわかるが、革堂町であるか靱屋町であるかはたしかめられないとするのが無難であろう。革堂町と一連の町というかたちで理解しておく。

(7) 受入128番とともに、本論末尾にmm単位に変換した表を付す。

(8) 補注(6)の表を参照のこと。判読できない「西」と「川」の間には、「かわ(側)」「頬」が考えられるが、確認できない。

(9) 各種の洛中洛外図屏風における小川の上の家についての言及は多いが、なかでも高橋康夫がその所在を網羅している。(文献8)p.111参照)

(10) 『洛中絵図 寛永拾四年丑七月二日』、『洛中絵図 寛永後万治前』の2点を参照した。(文献10)参照) 寛永14年は1637年。前者は寛永12年から14年を記載内容とする。後者は寛永19年(1642)の内容という。洛中絵図は町名、通りの幅、公家・武家・寺社などの名称のほか、ところどころに土地利用状態(藪・町屋・町・門前町など)が書き込まれている。しかし小川に沿った街区ではいずれも何も記されていない。そこで、「町屋」と記入された部分の立地と形状に着目する。「町屋」はつねに寺地や公家地などと同一街区内で隣接し、不定形な形状をしていることから、町地と寺地などとの境界線を明確に図示したと考えられる。紛らわしくなるおそれのある部分にたいして念を押して「町屋」と記したのであり、まぎれる心配のないところ、空欄もまた「町」ないし「町屋」であろう。すなわち小川にそった街区は東側・西側ともにいずれも町地である。

(11) 上京放火の意義については、補注⑨を参照。小川通り西側の寺地の移転と寺町の形成は、たんに都市域の防衛策という観点だけでなく、都市領土の排斥という観点からも評価されなくてはならない。なお、真如堂極楽寺が天正15年、百万遍知恩寺と行願寺革堂が天正18年5月、誓願寺が天正19年5月にそれぞれ移転している(文献11)pp.272-8参照)。これらの寺院は元龜4年の放火でいったんは焼失し、すぐさま再興に動き出すもの、寺観を完全に整える間もなく、移転させられたものと考えられる。つまり、たとえば誓願寺の場合、天正19年5月に更地として明渡されたというわけではなく、すでに元龜4年の段階から、権原のはっきりしない、事実上の更地と化していただろう。西側の寺院の不調と西側の通りの廃止とはこのような因果関係が想定される。また、そのような状態の寺地であるから、年代的にはまだ寺の土地であっても、そこに都市住民による諸設備が侵入することもあり得たと考えられる。

(12) この2つの敷地において、ウラの幅が記されていない理由を推測するならば、間口寸法とウラの幅寸法とが、位置として一致し、寸法として同値であるから省略されたのであろう。一方、3番においては間口寸法とウラの幅寸法が一致してい

る数値を明記している。5・6番と3番の違いを次のように解釈する。5・6番では単に寸法が一致するだけではなく、位置的に正対している。隣地境界線は間口からウラまで一直線であるから、記載が省略される。3番は寸法は一致しても位置は断層のように平行移動し、ずれている。だから省略されない。よって、5・6番を基準軸として南北方向の寸法をとることができる。

(13) 正確には、5番の文言から6番の間口寸法を導くことはできないが、便宜的に同値を用いる。6番の間口寸法が違っていたところで論旨に影響はない。なお、この雁行の表現から、5番より6番の方が北に位置することが知られる。そして、表1に示したように川幅を記すのは「西□川之上」以降であるから、この指出は西側である。つまり、これは東側北側から時計回りに記入された指出の、西側南側の一部である。

(14) 復原図では、間口寸法を家のオモテの幅とし、川幅をそのまま家の奥行とした。なお、洛中洛外図屏風に見られる描写を観察すると、家の奥行と川幅のバランスとしては、①家と川幅がぴったり一致するもの、②川幅が広く、家がウラ（西）側で足りていないもの、③家の方が広く、オモテ（東）の道路側にはみ出ているもの、3パターンあり得る。つまり家の奥行はあくまで任意かつ便宜的なものであって、当時の町屋の常識的な規模（2間強～5間弱程度であろう）を逸脱しないかぎりどうでもよいし、論旨にも関係ない。家のウラ側の建築線と隣地境界線がきわめて複雑な取り合いとなる場合があるが、作図上、建物の奥行を一定としたために生じている。

(15) Vra.ウラ（裏）には、「家の背後。または、家のうしろにある狭い土地。」という意味がある（文献12）p.731引用）。語義的に完全に合致している。

(16) Xedo.セド（背戸）「家の裏手、または、ある隠れた場所。」（文献12）p.744引用）

(17) 境界装置とは、築地、土堀、生け垣、木柵など。抽象的な権利境界ではなく、具体的に他者の侵入を阻み、あるいは視界をさぎぎる物。洛中洛外図屏風にもその存在が散見される。これらが家主ごとに小刻みに凹凸し、かつそれを厳密に計測しているとは考えにくい。

(18) 復原から恣意性を排除するため、川も通日も直線かつ平行を前提とした。実際には川も通日も真北よりすこし西に振れていて、川の方が傾きが大きい。川幅寸法は、数字の丸まり方から推して、厳密な計測を要していないか、暗渠化して正確にはできなかったものと考えられる。補注(14)に述べたように、家の奥行規模は任意である。なお、洛中絵図の靱屋町西側の北端に、よく似た小川の雁行があることを指摘しておく。敷地の裏行寸法が北へいくにしたがって漸減していることから、復原部分（受入131番）が街区の北端とする想定にも合致する。この点については補注(3)も参照のこと。

(19) この形態の根拠を詳細に触れておく。近接する奥行規模にごとに、1番～4番、5番・6番、7番・8番の3グループに分かれる。各グループごとに地尻を揃え、道路境界側に微細な出入を生じさせる。まず1番～6番について、建物の奥行＝川幅という前提により、道路に接して2間半の建物部分を想定し、なかでもっともセットバックした家（3番）に、川岸と他の家々のウラ側の建築線を揃えた。これにより、3番の家を最小として、個々の家の規模にばらつきが出ている。4番と5番のあいだ、および6番と7番で、奥行規模が切り替わる場合は、隣接する家を道路側で揃えた。

(20) 小川の東側に沿ってたつ家について、補っておく。「京都

府地誌 京都二」によると、針屋町の町名の由来を次のように説く。「針屋町 古代ハ、羅漢橋南町ト唱フ。天正頃、針屋宗五ト云ヘル者衆ニ代リ豊臣氏ヨリ小川ノ水上架屋ノ許可ヲ稟ク。故ニ、土人其家号ヲ町名ニ立テ、其徳ヲ戴クラ標ス。」（文献13）①p.73引用）秀吉から小川の上に家を建てることの許可をとりつけた者の手柄をたたえている。これを事実と仮定したならば、天正期には小川の上に家をたてることは原則として禁止であったことが知られる。ここでいう「許可」が、(a)新築の許可なのか、(b)既存の水上架屋の存続を許したもののなかによって、その禁止の程度が異なる。(a)ならば川の上の既得権は守られているが、(b)ならば、既存の水上架屋を取り壊すなり移動させるなりすることが求められていたことになる。(b)であり、もし移動が求められたのなら、そのもっとも簡単な移動先は河岸である。土台をもつ構造形式である川の上の家は容易に河岸に移されたであろう。「針屋町」の場合、実際には許可を得て小川の上に家をたてることが認められたのであるから、川の上に家がたっても良いが、針屋町以外では、(a)により、川の上に家がたっている景観と、(b)により、川の上は避けて家がたてられている景観の2通りが想定できる。また、東側の通りの西端に、すなわち小川の東岸に沿ってたつ家は、洛中洛外図屏風（上杉本）からも観察できる。まったく同じ時期に小川の川の上について言及した今谷明と高橋康夫は、示し合わせたように上杉本の描く草堂門前に疑問を呈した。東博模本と高橋本が草堂門前に川の上の家を描くのになぜ、上杉本では川の東側の通りの端に家を描く。川の東側の家について、「むしろ本来は小川の上に水上家屋として描き込むべきもの」（文献8）p.115引用）とし、「この小川に限っては東博模本の描き方が残存文書に合致し、写実・記録性があると考える」（文献13）②p.222引用）という。しかし、提出した復原図が示すように、裏行寸法の違いによって道路境界線＝建築線はきわめて著しく雁行しており、それは軒の出具合程度の凹凸ではない。当時の家1軒分の裏行を想定してあまりある凹凸である。おそらく川の上にたてられるのと同等の選択肢として、川を越えて東岸に沿わせて街路上にたてられた結果であろう。復原図のような、天正15年に現われた形態が、放火以前にはまったくあり得なかったとする理由はない。写実性に定評のある上杉本が描いたように、東岸にも家がたてられる傾向があり、むしろ天正期の例は、古くからあった習慣が再現されたものと考えられる。

(21) なお、3番と9番にて、分単位までの計測をへて間口寸法とウラの幅寸法が一致する。このどちらか一方を軸として規準とした場合、ウラの幅を記さない5番の扱いに困るうえ、結局は他方ですることになり、いずれを選んだにしてもその恣意性を避けることはできない。補注(2)で推定したように、寸法が一致しているだけでは家とウラ地が正対しているとは限らない。むしろ、（位置的にずれているにもかかわらず）これはどまてに正確に間口とウラの幅が一致することは、ウラ地の規模を建物の規模に準拠して決定したことの証左となる。ただし、結果論的には4番の隣地境界線が直線化されるため、3番を規準とすることは可能であった。

(22) 物に即して寸法を計測する場合、境界装置の芯を捉えて、芯々で計れば物の厚みは生じない。なぜこの部分だけ厚みをもった物が存在しているのかは断定できない。

(23) 短冊形地割をもった町域が完成する過程の、概念的なモデルとして示す。通りの位置や規模、図②における囲いこまれたウラ地の規模については、正確な値は知り得ない。ただし、

5番と6番のあいだにある隣地境界線のわずかな雁行は示唆的である。

㉒ 文献史料上、小川の上に家の存在が断定されるのが、文明7年(1475)である。「長興宿禰記」文明7年5月27日)「大雨降る。暁天より甚しく雨降る。午の刻時分、洪水以ての外、賀茂河の水出ます。陣中東西、大河の如し。小河在家、数十丈流失す。」(文献13)㉑p.59引用)

㉓ 川の上を、誰がなんのために、どのようにして分割し得たか説明できない。

㉔ 「中世的町屋から近世的町屋への転換」と表現される(文献3)㉑p.234引用)。また、ウラ地の囲いこみについては、「洛中全体のウラ地は近世初頭に個々の家々による囲い込みが柵や塀によって完全に進んでいたとは言いが、その傾向はあった」(文献3)㉑p.208引用)。

㉕ 伊藤鄭爾による、「地割を自由にかえうる権利は原則的には処分権の一部として家主にあったと考えられる」とした指摘(文献14)p.177引用)は、中世的な「本家一別家関係」のもとでの家主の権原を示したものではあったが、その意味での家主が不在の16世紀末の上京において、個々の町人＝家持にそうした家主の権原が移譲されたと考えられることができる。

㉖ ここにいう地割先行型とは、都市形成のタイプの1つとして、地割の形態があらかじめ土地の上に施されていて、この地割のもつ形態に建物形態が規定される過程を指す。補注(3)前掲および、文献3)も参照。

㉗ 近世都市化・城下町化として論じられる織豊期京都について、地子免許(天正19年)の画期性は強調されるが(文献11)参照)、上・下京の差異、とくに上京放火の意義についてあまり重視しない。たとえば瀬田勝哉によると、「地子の全面的免除を完遂させる為の最も重要な準備作業は、天正十二年に行なわれた京中寺社本所知行分の指出の提出であり、それにつづく戸口調査であった」という(文献15)㉑p.411引用)。放火後の上京の状況を若干詳細に見ておく。放火によって創出された更地とはいかなる性格のものであったか。「四日。きやうちうにはかに大やけにて。かみきやうちうのになる。のふなか。むらみまいにまいる。この御所の御あたりはかたくもうしつけてめてたし。」「(『御湯殿上日記』元龜四年四月四日条)から、「この御所の御あたり」を除いて上京が軒並み灰燼に帰した様が伝わる。上京放火の都市支配的な意義について、高橋康夫は「信長は焼討＝『畋』によって上京の土地から穢・禍を除去したといえよう。そうしてはじめて信長は、土地と旧住人(旧体制)とのつながりを抹消し、更地となった上京をみずからの直接支配に組み込むことができた」といい、この更地を「無主・無縁の場」と表現した(文献15)㉑pp.197-8引用)。この信長にとつての「穢・禍」、ないしは「無主・無縁」の内実を、領主的土地所有の観点から精査したのが土本俊和である。領主的土地所有の本質が「地子を取収する権原」であり、地子が本来的に地利、すなわち「土地から上がる利益」に由来することを指摘したうえで、次のように把握する。「焼討後、いまや地利を産まない上京の現実の土地の上には領有関係の錯綜はない。もし領有関係の錯綜があるとすれば、書面の上の数量についてだけである」(文献3)㉑p.243引用)。さらに、7月に信長は還仕令を出し、上京の復興に努める。このとき、人足役(家別の労働供与、後に軒役の代銭納)としての把握により、間口尺別や地積別が賦課単位としての意味を失う。あわせて、「書面の上の数量」として形態化しつつも存続する領主権のすべてではなくその一部に「替地」が与えられ、実質的に上京から領主的土

地所有が解体される。この経過を経て、天正19年(1591)の洛中地子免許を先取りするかたちで、上京では錯綜かつ重層化した領主的土地所有から信長による直轄支配へと移行する。すなわち、地子高を介して与えられる形態としての短冊形地割が発生するための状況と動機が、ともに存在しない。

㉘ 水路の岸を各種の境界線としても機能させている場合には、水路と境界線との時間的な前後関係を一概に論じることはできない。このケースのように、「地割を水路が串刺しにする形態は屋敷地が地尻を裏手へ延ばしてくる段階で水路をまたぐ形で生まれた」(文献3)㉑p.229引用)、すなわち境界線の方が後の敷設と考えられる。

㉙ そのとき、町境界(線)が画定するよりも前に、家々による町域の分割がおこなわれ、自己組織的に町境界が定められる場合と、所与あるいは既存の町境界線にたいして、一気にそこまでを個々のウラ地とするような、町境界線が先行する場合があります。復原年代である天正15年が、さらに裏行を増大させる途上にあるのか、すでにほぼ完成形であるのか、容易に判断はできない。ただし、補注㉑でふれた推定を踏まえて、「明治六年二月改上京第九区御改正給図面」(小川小学校所蔵文書)の鞍屋町の北端部を参照するならば、北から順に奥行は、五間、五間五尺、七間半、七間、十一間、式尺七寸、十二間、式尺五寸と、漸増している。近い規模とみることができるところから、(場所の比定が正しいとする条件付で)隣地境界線の生成は天正15年の段階でほぼ完成しているといえる。なお、この絵図面によると、小川の川筋は、道路境界線からおおよそ3間ほど家屋敷内部に引き込まれた地点を流下しており、小川通りにたいしてわずかに北西に振れているが、雁行はしていない。

㉚ “some pre-urban nucleus”(文献1)p.99参照)

## 文献

- 1) Rossi,Aldo(1982),The architecture of the city, the MIT press.
- 2) ①吉田伸之(1985)「町人と町」(歴史学研究会・日本史研究会編「講座日本歴史5 近世1」pp.151-188,東京大学出版会),②朝尾直弘(1988)「惣村から町へ」(朝尾直弘他編「日本の社会史 第6巻 社会的諸集団」pp.323-362,岩波書店),③内田九州男(1990)「都市建設と町の開発」(高橋康夫・吉田伸之編「日本都市史入門Ⅱ 町」pp.41-57,東京大学出版会)
- 3) ①土本俊和(1994)「近世京都における祇園御旅所の成立と変容—領主的土地所有の解体と隣地境界線の生成—」,日本建築学会計画系論文集No.456,pp.227-235,②土本(1994)「一七世紀前半京都の都市膨張—地尻年貢地の形態と成立過程—」,同No.462,pp.167-176,③土本(1995)「一七世紀後半京都における周辺域の形態」(大河直躬先生退官記念論文集刊行会編「建築史の脈—大河直躬先生退官記念論文集—」中央公論美術出版)pp.142-157,④土本(1995)「近世京都の拡大過程に関する編年」,建築史学No.25,pp.130-156,⑤土本(1996)「近世京都にみる『町なみ』生成の歴史的前提」,日本建築学会計画系論文集No.479,pp.207-215,⑥畑林真之・土本俊和(1996)「近世松本城下町における都市の原景—水系と町割から見た都市域の形成過程—」,同No.483,pp.221-230,⑦土本(1996)「洛中地子赦免と町屋—建物先行型による短冊形地割の形成過程—」,建築史学No.27,pp.47-75,⑧土本(1997)「近世初頭京都の家と屋敷—町目式と町駄による家屋敷売買規定からの再検討—」,日本建築学会計画系論文集No.491,pp.197-204,⑨土本(1997)「陣取放火と地子免除—織田期京都上京における寺社本所領の解体過程—」,同No.495,pp.239-246,⑩土本

(1997)「織豊期京都における上京と下京—洛中検地による家屋敷指出からみた差異—」,建築史学No.29,pp.55-84,㉑土本(1997)「小屋がけによる町—聚築第建設に促された天正末京都の都市形成—」,日本建築学会計画系論文集No.500,pp.221-228,㉒土本(1997)「家から家屋敷へ—戦国・織豊期京都上京における誓願寺門前の川の上の家—」,同No.502,211-218,㉓土本(1998)「織豊期京都の小屋と町屋—棟割長屋を原型とする短冊形地割の形成過程—」,建築史学No.31,pp.83-112,㉔土本(1999)「地子と地租の間—近世京都の賦課形態における町人足役の位置—」,同No.33,pp.110-134,㉕須藤優子・土本俊和(2000)「近世初頭京都のウラ地とウラ構え」,日本建築学会計画系論文集No.528,pp.203-210,など

4) 小川保(1988)「近世都市における宅地の境界とその変遷—京都の町を事例として—」(稲垣榮三先生還暦記念論集刊行会編「建築史論叢」pp.290-333,中央公論美術出版)など

5) 宇野日出生(1993)「建仁寺塔頭大中院文書について」,古文書研究No.37,pp.83-97

6) 吉田伸之(1980)「公儀と町人身分」,歴史学研究別冊特集,青木書店,pp.96-111

7) 小川保(1993)「天正・文禄期の京都の町—大中院文書による概観—」,京都市史編さん通信No.251,pp.1-4

8) 高橋康夫(1988)「洛中洛外—環境文化の中世史—」平凡社

9) フロイス(1978)「日本史3 五畿内篇Ⅰ」中央公論社,p.245引用

10) ①宮内庁書陵部編(1969)「洛中絵図 寛永拾四年丑七月二日」吉川弘文館,②京都大学附属図書館蔵・中井家旧蔵(1979)「洛中絵図 寛永後万治前」臨川書店

11) 小野晃嗣(1993,初出1940)「京都の近世都市化」(「近世城下町の研究」pp.268-296,法政大学出版局)

12) 土井忠生他編訳(1995)「邦訳 日葡辞書」岩波書店

13) ①京都市編(1980)「史料京都の歴史 第7巻上京区」平凡社,②今谷明(1988)「京都・一五四七年」平凡社

14) 伊藤鄭爾(1958)「中世住居史(第二版)」東京大学出版会

15) ①瀬田勝哉(1967)「近世都市成立史序説—京都における土地所有をめぐる—」(寶月圭吾先生還暦記念会編「日本社会経済史研究(中世編)」吉川弘文館),②高橋康夫(2001)「京町家・千年のあゆみ—都にいきづく住まいの原型—」学芸出版社

(2002年6月5日 受付)

[受入131番・128番の換算寸法]

受入	No.	間口寸法					裏行寸法					うらははば寸法					川の幅寸法		家主名
		間	尺	寸	分	mm	間	尺	寸	分	mm	間	尺	寸	分	mm	間	mm	
131	1)	2.0	0	3	5	4045	12.0	2	8	0	24482	1.0	5	0	0	3485	2.5	4924	孫四郎
	2)	2.0	0	8	5	4197	12.0	3	2	0	24604	2.0	1	1	5	4287	2.5	4924	五郎三郎
	3)	1.0	4	0	0	3182	12.0	1	5	0	24089	1.0	4	0	0	3182	2.5	4924	弥七
	4)	2.0	2	2	0	4606	12.0	2	2	0	24301	2.0	1	0	0	4242	2.5	4924	字福
	5)	2.0	4	1	0	5181	10.0	4	0	0	20907	—	—	—	—	—	2.5	4924	宗国
	6)	2.0	4	1	0	5181	10.0	4	0	0	20907	—	—	—	—	—	2.5	4924	新右衛門
	7)	1.0	5	1	0	3515	7.0	3	0	0	14696	2.0	1	0	0	4242	3.0	5909	甚左衛門
	8)	2.0	4	1	0	5181	6.0	5	9	0	13605	2.0	0	6	0	4121	2.5	4924	新五郎
128	0)																		浄極
	1)	1.0	4	1	5	3227	15.0	0	0	0	29543	1.0	3	0	0	2879			彦次郎
	2)	1.0	6	2	0	3848	19.0	1	0	0	37724	1.0	5	0	0	3485			孫右衛門尉
	3)	1.0	3	0	5	2894	19.0	1	0	0	37724	1.0	3	0	5	2894			彦兵衛
	4)	1.0	3	9	0	3151	14.0	5	3	0	29179	1.0	4	3	0	3272			彦右衛門尉
	5)	2.0	1	7	0	4454	18.0	5	8	0	37208	—	—	—	—	9848			宗意
	6)	1.0	5	6	0	3666	14.0	5	0	0	29088	1.0	3	2	5	2954			□□
	7)	2.0	3	6	0	5030	19.0	0	0	0	37421	2.0	4	7	0	5363			喜介
	8)	2.0	1	2	2	4309	19.0	0	0	0	37421	1.0	5	9	0	3757			寿七□
	9)	2.0	0	2	5	4015	18.0	5	7	0	37178	2.0	0	2	5	4015			中持
	10)	1.0	5	6	5	3681	18.0	4	0	0	36663	1.0	4	2	0	3242			与三郎
	11)	1.0	3	8	0	3121	10.0	5	8	0	21452	1.0	3	8	0	3121			源左衛門尉
	12)	0.0	2	9	0	879	10.0	5	8	0	21452	—	—	—	—	—			通り道
		1.0	6	0	0	3788	7.0	5	0	0	15302	2.0	0	4	0	4060			町之会所
	13)	2.0	1	5	0	4394	?	4	5	0	?								